
ほのぼの報告書

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの報告書

【Nコード】

N9893G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

総隊長に命令され、日番谷とやちるは仕事に挑む。はたして、この二人で仕事は出来るのか！？温かく見守って下さいませ。（日×やち寄り）

事の発端

鈴をしゃんしゃん鳴らしながら、猫じゃらしを前足で引つ掛けるその猫を、やちるは面白そうに覗き込む。やちるは思う。出来る事なら、あたしも猫になってみたいな、なんて。毎回楽しそうに遊んでいる動物を見るとそう思うのは、もうやちるの習慣になっていた。

「ひつつー！ あっちでね、猫がね、鈴で猫じゃらしをしゃんしゃんやってて…」

「あー分かった分かった」

駆け寄ってきたやつるが放つ文法が成り立っていないその日本語に、日番谷はさつさと終止符を打った。何故だった二人でこんなのかな野原にいるのか。まずはその説明からしよう。

——三日前。

この日、冬獅郎は何人かの剣術の乏しい者を引き連れ、十一番隊に向かった。その目的は言うまでもない、修行をさせるためだ。

「更木、居るか？ 更木！」

聞こえてくるのは恐らく更木のものであろういびき声。

——何を呑気に寝てやがるんだ、あいつは…。

確かにここ最近、隊長業務は落ち着きを取り戻し、ゆっくり出来る時間が増えてきた。だからと言って、呑気に寝る事もないだろう。せめて、隊長なのだから部下の修行を見てやつたりなどのことが必要だ。

「草鹿！ 斑目！ 綾瀬川！ 誰でも良い、出てきやがれ！」

隊舎内の霊圧を探る限り、草鹿を除いたそれ以外が隊舎にいることは火を見るより明らかだ。しかし、どうやって奴等の内、誰か一人でも隊舎の外に出そうか、その手段に手こずる。毎回そうだ。

「…しょーがねえな…」

無造作に背中に納めてあった刀を引き抜き、「お前等、ちょっと下がってる」と、隊員を少し、下がらせる。

「今から一番最初に出てきた奴は、俺とケンカができるぜ。…どうだ？」

そう、小さく呟く。隊員達は、「日番谷隊長、お止めになった方が…」と止めに入るが、それはもう遅い。

「その勝負、乗ったあッ!!」

真っ先に出てきたのは、十一番隊の斑目一角。日番谷は「やっぱりな…」という思いで斑目を見つめる。

「斑目、一つ条件だ。俺がこのケンカに勝ったら、今俺の後ろにいる隊員達の修行についてくれねえか？ どーも剣術が乏しくてよ」「そーゆー事は、勝ってから言っ下さいよ、日番谷隊長！ 行くぜ!」

日番谷は瞬時に一角の鳩尾みぞおちに刀の柄を付きたて、寸止めする。

「反応遅えし初動も遅い。これが柄じゃなくて刃の方だったら、おめー死んでたぞ」

「…日番谷隊長はいつつも動き出すのが早すぎなんスよ…。…で、修行でしたっけ？ 分かりました」

「…？ 斑目、どうした？ やけに聞き分け良いな、今日は…」

いつも諦めの悪い一角には似合わない、あっさりとした返答。それに疑問を持った日番谷は率直に質問をする。

「いや、正直暇してたんで、丁度良かったっス。そんじゃ、みつちりと修行、付き合いますよ。何日預ければ良いっスか？」

日番谷の率直すぎる質問に少し苦笑して、一角は答えた。そして、いつものようにお預かり期間を聞く。つい最近から日常のようになったこの会話だ。つまり、先のあのやり取りも日常的なものだったのだった。

「そうだな…。五日で頼む」

「了解イ！ そんじゃ行くぜ、てめーら！」

一角の元気な声で、日番谷の背中の方で怯えていた隊士達は「は、はい！」「と声の裏返った返事をして、そそくさと一角の方に走りよって行った。

ここまではいつも通り。違うのは、ここから先だ。

日番谷は十一番隊からさほど遠くはない一番隊舎に足を運んだ。十番隊にいる時、招集がかかっていた事を思い出したのだ。時間には充分に間に合う。日番谷は悠々と歩きながら、向かう。

「…で…何スか？」

「おお。その事なんじゃが…今回、日番谷隊長と十一番隊副隊長の草鹿とで任務に当たってほしいんじゃ」

「は？ 合同任務…ということですか？ しかし、何でまた…」

日番谷は伏せていた顔をハッと上げて、不思議そうに総隊長を見つけた。その普段は見せない子供のような表情に、総隊長は微笑する。それに気が付いた日番谷は、決まり悪そうにキリツと普段の表情に戻す。

「おぬしの剣術と草鹿のすばやさが必要とされておるんじゃ」

自分でたてた抹茶をズズ…と一口飲むと、総隊長は日番谷をまっすぐに見てそう言い放ったのだった。もちろん日番谷は少し動揺して反論する。

「ちょっと待って下さいよ。剣術なら明らかに更木…隊長の方が上だし、この件は十一番隊で良いんじゃないんすか？」

「まあ、言ってみれば分かる。のう？ 草鹿」

日番谷の仕事の資料を渡し、後ろの畳に目をやった総隊長。瞬間、ごとりと畳が動き、ピンクの頭がちらりと日番谷の視界に入る。

「えー？ いつからばれてたのー？」

「最初からじゃ。茶菓子を盗みに来ておったな？」

「えへへ」

まるで自分の孫のようにやちると楽しげに話す総隊長を、日番谷は少し視界に捕らえながら渡された資料に目を通す。

「…分かりました。んじゃ、行くぞ、草鹿」

「はあーいっ」

ぴょーいと日番谷の頭に飛び乗り、乗った瞬間に不平不満を述べる。

「ひつつーの頭剣ちゃんの肩と違ってせまーい！」

「…なら降りろよ。俺は更木じゃねえんだ」

蚊を払うように手首を降り、降りるように言い聞かせる。しかし、やちるは一向に降らない。日番谷は諦めて、頭にピンクのそれに乗せながら、瞬歩で仕事場に向かった――。

暗黒への結界

「まったく…何でこんな事になってんだか…」

辺りを見渡す限り見えるのは、何の異常もないただの野原。こんなところに虚など居るはずもない。そもそも、ただの虚退治ならばそこら辺の死神を使えば良いだけの話だ。しかし、そうしなかったのはやはり何かがあるからなのだろう。

「ねー、ひつつー！」

やちるがルンルン気分で駆け寄ってくる。日番谷はそれを少し冷めたような目で見つめ、

「…何だよ？」

と返事を返す。何でこんな面倒くさい奴と仕事をしないといけないのか。そもそも何で俺なのか。言いたい事は山ほどあるが、とにかく今はさっさと仕事を終わらせたかった。早く帰って机の上に溜まりに溜まった資料を乱菊に荒らされる前にやり終えなければならぬ。とにかく、暇ではないのだ。

「あのね、さっきの猫がね！」

「また猫の話かよ…」

これで何回目だろうか、と考えてしまつくらい、やちるは猫に夢中になっていた。ここには野良猫が多すぎるんじゃないのか、そう言いたいくらいだった。

「お前はさつきから猫しか探してねえのかよ…」

はぁ、とため息をついて、そして呆れる。気持ちの良い風がふわりと日番谷の隊首羽織を持ち上げて、過ぎ去って行く。しかし、日番谷にはその風すら今は鬱陶しい。

「探してなんかないよ？ さつきからあの猫、ここから離れないんだもん」

「離れない？ 何言ってるんだ、お前？」

猫が呑気な事はやちるとして知ってるはずだ。その気分屋な猫が、この長時間、同じところにずっと留まっているはずがない。日番谷はそう思う。

「あの猫、さつきからこつから先に行かないの。何でかなあ？」

「何でって…俺が知るか…ん？」

やちるが示したその場所に、どことなく違和感があった。何かは分らないこの異様な雰囲気、今にも飲み込まれそうになる。

——もしかしたら…。

日番谷は反射的に立ち上がった。幾つか千切れた草が風に乗って流れて行く。日番谷にとっては、最早その風すら異様なものと化していた。

「おい、草鹿。ちょっと退いてろ」

確かめたいことが、一つ。日番谷は氷輪丸を引き抜いた。

「ひつつー？ どしたの？」

やちるがそう訊いたと同時に、やちるが示した場所：否、『空間』を日番谷は切り捨てる。綺麗に切り取られたその空間の先には、ただただ黒い空間が広がっている。日番谷はその光景を見てから、その先から感じる事が出来る異質な霊圧に、思わず唾を飲み込んだ。

「…成程な…更木じゃ無理なはずだぜ」

思わずそう呟いてしまう。更木ならこんな結界なんかに気づきもしないだろう。やちるも不思議そうにその切り取られた空間の、更に先。漆黒の世界を見つめている。

——隊長と副隊長揃ってこんなんじゃ、流石に無理だったろうな、今回の仕事は…。

日番谷はそう思い、ため息をついた。同時に、頭に重石が乗ったような感覚に襲われる。やちるが、軽やかに日番谷の頭に飛び乗った衝撃だった。

「ねえ、早く行ってみようよ！ この先に」

「…変わった奴だな…」

やちるの好奇心に満ちたその言葉に、日番谷は少し笑みを浮かべた。風が吹いて、銀色と桃色が揺れ、先ほどの猫は風に乗って行った草を追いかけている。

「あ、にゃんこ！」

「連れてかねーぞ」

間髪居れずに日番谷がそう言い放ち、やちるはむすっと頬を膨らませた。しかし、やちるは猫から視線をすぐに逸らし、目の前の真っ暗闇に目を向けた。食い入るようにその異様な光景を見つめるやちるを、日番谷は、それこそ異質だ、とも思う。

「早くいこ！ ひつつー！」

「さっきからお前の言ってる事が矛盾してんだよ……」

「矛盾て何？」

「……」

答えてもどうせ分からないと思い、日番谷は困ったようにこめかみ辺りを人差し指で少し掻いた。そして、一歩踏み出すと同時にやちるの問いに答えた。

「……お前みたいなことを言うんだよ」

存在が矛盾してる、とでも言いたいかのような言い方ではなく、少し小ばかにしたような言い方に、やちるは少し笑う。それにつられて、日番谷も少し笑った。片手に握った刀を強く握りしめ、暗黒の世界へと、身を染めていった。

炎の灯り

「ひつつー、ここ、暗いねえ」

「ああ、そうだな。まったく…これじゃあ視界は頼れねえな」

日番谷は、はあ、と息を吐いた。やちるはその暗闇に少しでも光が差し込んでいないか、きよろきよると辺りを見渡している。

「…そういや…虚はどこだ？」

「え？ここに虚がいるの？」

「お前…資料とか読まねえのか…」

「うん。いっつも剣ちゃんが好きそうにやってるから、あたしは何にも知らない」

どうなってるんだ、十一番隊は…と、ただため息をつくことしか出来なかった。その様子をやちるは不思議そうに見つめている。何故ため息をついているのか、やちるにとっては到底理解できないのだろう。会話を少しずつ、途切れては繋げ、途切れては繋げ、の繰り返しだった。もともと、やちると日番谷は気が合わないのかもしれない。それもそうだ。外見は同じ子供でも、中身が全く違うといっても良いのだから。やちるの幼稚な考えが、日番谷には伝わらないのだろう。

「…まったく…どんだけ歩いてても暗闇ばっかだな」

流石に同じ景色に飽きてきたのか、日番谷はそう吐き捨てた。やちるも「そだねー」と合いの手を入れる。この状況をどうにかしようと思った日番谷は、刀を持っていない左手を、手前に広げる。

「破道の三十一、赤火炮」

ぽんつ、と小さく音を立てて、掌に火の玉を浮かべる。しかし、辺りの様子は一向に変わらない。日番谷は四方、八方と辺りを見渡し、そして、最後に上を見上げる。その行為があまりに突然だったので、やちるは思わず日番谷手を離してしまい、するりと地面に落ちそうになったその刹那。

「…草鹿、こつから外へ、出られるか」

と、刀を鞘にしまい、片手でやちるの後ろ襟を引っつかむ。

「へ？」

やちるが答える間もなく、日番谷の舌打ちする音が聞こえて、やちるは少し肩をすくめた。ぞわっと、背中を舐められたかのような違和感を感じ、やちるは身を翻して日番谷の腕を縫い、にゅりりと蛇のように背中にもぐりこんだ。僅かに震えているかのようにも感じられる。

「…草鹿、落ち着け」

静かにそう言つて、やちるを氣遣うように腕を後ろに回した。

「ひつつー、この感覚、虚じゃないよ…」

「ああ、破面、だろうな…」

そう言つて、炎を消す。元々氷雪系の斬魂刀をもつ日番谷が炎熱系の鬼道を長時間使うというのは、かなり身体に負担がかかる事なのだろう。また、漆黒が二人に襲い掛かる。あんな氣配を感じてしま

つたからには、もうこの場所も安全ではないと確信してしまう。どこに潜んでいるかも分からない敵と対峙するというのは、隊長格といえどきつい事なのだろう。

「…ちくしょう」

「え？」

日番谷が苦々しく呟いた。やちるが、それに反応する。

「霊圧感覚が鈍ってきやがった…」

額に少し手を触れて、ほう、と息を吐く。

「大丈夫だよ、ひつつー！ 剣ちゃんは、いっつも霊圧分からなくても敵をなぎ倒しちゃうんだから！」

この暗い雰囲気盛り上げようとやちるは明るく日番谷に言った。

「…」

返事はない。その代わりに、息が切れるような音が聞こえた。

「ひ…ひつつー？」

やちるの心配したような声が、辺りに響いた次の瞬間、日番谷はすうっと力が抜ける感覚を覚えた。

「大丈夫、ひつつー！？」

背中から反射的に飛び降り、日番谷の顔を覗きこんだ。どう見ても

おかしいのは一目瞭然だ。ほんの僅かだけうかがえる日番谷の表情は、どう見ても「普通」じゃなかった。肩で息をしているような息の荒さだし、手を近くにやっただけでも分かる。日番谷は、相当な熱を持っていた。

「気にすんな。…のぼせただけだ」
「の…」

あんな、短時間の鬼道だけで？ と、やちるは思った。それを口にしようとしたとき、やちるはハッと辺りを見渡す。

「明るい…」
「はっ…今頃かよ？ ま、鬼道の発動までに、ちっと時間食っちゃまったがな…」

膝を立てて、ぐっと立ち上がる。日番谷は、やちるが気付かないほどの速さで、四方八方に赤火炮を恐ろしいほど多くの数をばら撒いていたのだ。術者から離れた鬼道の発動時間は遅くなる上に、かなりの疲労も伴う。生半可な気持ちでやったわけではない、ということがやちるには直感で分かった。

「これで…心置きなく闘えるな」

白刃の刃が、きらりと炎の光に反射して、鞘から顔を覗かせた。

炎の灯り（後書き）

この小説も多くの方々に読んでいただいております。
本当に嬉しいです（^^*）

と！　　いうわけで…今回は皆様にアンケートを実施しようと思いま
す♪

詳しくはこちら↓<http://ameblo.jp/runak>
k/

親子

炎が揺らめいている。

それに応じて、日番谷の銀髪がまるで共鳴しているかのように輝いていた。

キラリ、と白刃の刃が光を反射し、一瞬やちるの目をくらます。

「さすが、隊長格というべきだな。この場をあんな短時間で明るくしてしまうとは…」

どこからともなく、声が聞こえる。

それはこの空間で反響し、どこから聞こえてきているのかも曖昧だ。やちるは、辺りを見渡す。

「…そりゃどーも」

受け答えをしながらも、日番谷のその姿に寸分の隙もない。

瞬きはおろか、呼吸をする事さえ躊躇してしまいそんなその殺気に、今にも飲み込まれそうだった。

普段やちるは、「殺気」を感じた事がない。剣八と任務をする時は、大概「殺気」ではなく「喜び」や「歓喜」といった明るいものだった（実際行っている事は決して明るくはないのだが）。

しかし、今はどうだろう。

身体がぴりぴりして、何とも言えない恐怖感がある。身体を思ったように動かせないような気がした。

「草鹿」

相当な殺気のわりには、優しい声が飛び込んでくる。
やちるは、日番谷の「十」の文字を見つめた。

「怖いなら逃げ帰ってもいいぜ?」

――逃げる。

それは十一番隊では論外の言葉だった。
逃げるくらいなら、食い違えてでもその場で戦って、それから倒れる。

ケンカで死ぬのが本望なら、逃げ帰ってくる事なんかあり得ない。
やちるは、それがよく分かっていた。

そして、十一番隊がそういう隊だという事を日番谷はよく理解していた。

「あたしだって、戦えるよ?」

どこのどいつに似たんだろう。

こんな凄い殺気の中で、敵の位置すら未だに分からないこの状況で、戦える喜びをかみしめているのか、口角が上がっている。

「ホント、お前等って親子みてえだな」

いつの間にか、日番谷の口角まで上がっている。

「これなら、問題ねえな...」

小さく、そう呟く。何が問題ないのか。そんなこと、やちるには分からない。

日番谷がグツと中腰になったかと思うと、やちるの目の前にあった純白の隊首羽織が、翻った。

日番谷の姿は、既に見えない。

「ひつつー速いなあ…。でも！」

やちるが踏み込んだ、次の瞬間。その場の空気が、一気に渦を巻いてやちるを見送った。

彼女の速さは、下手すれば全隊員の中で一番なのではないか、そう思われるほどの速さだ。

しかし、普段は剣八の背中にいるため、その事を知っている者は少ない。

辺りの景色が、まるでジェットコースターに乗っているかのように流れて行く。相当な早さだ。

それにしても、敵のどこに居るのだろう。

先ほどからこの速度で捜しているが、姿はおるか、気配すら分らない。手がかりと言えば、破面の馬鹿にしたような笑い声だけ。

「はははは！ どこ捜してんだよ！ こっちだって言ってるんだろ！」

こっち、と言われても分からないのが現状だ。完全に挑発しているような、その物言い。

この程度で心を揺るがして平静を失ってしまえば、敵の思いつきばである。

だからと言って、言われっぱなし、と言うのも何だか気に食わない。

「…てめえこそぐだぐだ喋ってねえで逃げることも考えろよ」

「はあ！？ 何言ってるやがんだ！ はったりかましてんじゃねえよ！」

「はったり？　んな訳ねーだろ、何で俺がそんなつまらねえことで嘘つかなきゃならねえんだ」

何を、と破面の言葉はここで止まる。

何があったか、日番谷には理解が出来る。

今まで動かしていた足を、止めた。

スツと、銀髪が揺れる。

「やっぱり、親子だよな…」

手を頭に当てて、少し呆れたように、感心したように、そう呟いた。

自由な猫

「ひつつー！ つつかまえたーっ！！」

「ああ、そのまま絞め殺していいぞ」

サラリとブラックジョークをかまし、瞬歩でやちるの位置まで移動した。

やちるが割ったであろう破面の頭についていた仮面は、すでに跡形も無い。

「このチビが…っ！ 何で俺の場所を…」

「あたしね！ 鬼ごっこは嫌いだけど、得意なんだあ」

かくれんぼなら好きなんだけど、と付け加える。

この言葉、どこかで聞いたことあるな、と日番谷は考えをめぐらした。

——鬼ごっこは嫌いだが、苦手じゃねえ、か…。

更木である。すぐに思い当たった。

ずっと昔、日番谷がまだ幼かった頃の話だ。

隊長になったばかりで、いきなりの共同任務。それが更木と話した、最初のお機会だった。

日番谷は逃げていた敵を探すのに苦労していた。

「なあ、更木…隊長。見つかったか？」

「面倒くせえな。ガキ、てめえはここで待ってろ」
「はあ？ 何言って…」

日番谷が最後まで言いきらないうちに、更木の姿は消え、次の瞬間、追っていた敵の悲鳴が聞こえた。びくつと肩をすくめて、身を縮めた次の瞬間に聞こえたのが、この言葉だ。

「鬼ごっこは嫌いだが…苦手じゃねえぜ」

思わず、日番谷の口元に笑みがこぼれた。

「やっぱり親子だよ、お前等は…」

死にかけの破面と意気揚々とはなしているやちるをみて、つくづくそう思った。

つい言葉にしてしまったのは、本当にそう思っているからだろう。ピンクの髪が、楽しげに揺れた。

「ねー、ひつつー、何やってんのぉ？」

破面が消え、空間が元通りになった草原で、日番谷は伝令神機をいじっていた。

「何って…報告書だよ。これくらい、更木がやってんのみたことあるだろ？」

「ないよ」

――…確かに、なさそうだ。

やちるが即答した直後に、日番谷も同感した。

しかし、そんな状況でよくもまあ隊が成り立っているものである。

そこで、日番谷は考えた。

せめて、やちるにだけでもちゃんとした報告書の書き方を教えておいてやろう、と。

「草鹿、お前：書いてみるか？ 報告書」

「え！ いいの！？」

ひよい、と頭に飛び乗って、伝令神機を日番谷からひったくる。

「ほんとーにいいの！？」

「ああ、てきとーに書いとけ」

さすがにやちるの報告書だけでは何も報告出来ないと思い、

「後で、正式なの出しておくから」

日番谷はそう付け足したのだった。

ぴっ、ぴっ、と幼稚な音が日番谷の鼓膜を揺さ振る。自分が打てばもっと早く済むのに、と今更後悔してきた。これだけ時間を掛けているのだ。そろそろ終わってもいい頃だろう。

「おい、草鹿。何書いてんだ？」

ひよい、と画面を覗こうとすると、やちるがバツと腕を挙げて、

「見ちゃダメ！」

と断固拒否するものだから、日番谷は簡単に諦めて、立ち上がる。

「草鹿、それ打ちながらでいいから、帰るぞ」

「あいあいさー！」

元気な声が、辺りに木霊する。

猫が、二人の前を軽やかに跳んで通過して行った。

思わず、やちるはそれを目で追ってしまったのだった。

——もう、異空間による壁は無い。

自由な、猫の姿だ。

ほのぼの報告書

任務を終えた日番谷は、一人で一番隊舎へと足を運んでいた。ゆつくり、ドアを開く。ぎい、と懐かしいような、少し軋んだ音が鳴った。

「総隊長」

日番谷が、凜とした声でその名を呼んだ。長いひげが揺れて、視線が日番谷に向けられる。

その少年の真っ直ぐな姿勢が、総隊長を感嘆させる。何の迷いもない、翡翠の瞳と総隊長の鋭い視線が空中でぶつかり合った。

「何じゃ、日番谷隊長？」

「…報告書、持ってきました。…一応」

小さく「一応」と付け足して、紙束を出す。ばさつ、と音が鳴っている辺りから、その量の多さが伺えた。

「おお、やはりアレは草鹿が書いたものか」

総隊長はふむ、と鼻を鳴らして、ひげを撫でた。優雅なその姿は、「総隊長」としての威厳がある。日番谷は、改めてそう実感した。

「総隊長。…草鹿、どんな報告書、書いてました？」

一番気になっていることを、真っ先に訊く。草鹿に内容を隠された為、それがずっと気がかりだったのだ。

「…仕方ないの、草鹿には秘密にしておくのじゃぞ」

「え？ 何ですか？」

中を見ればわかる、とだけ言われ、日番谷は書類に書き写された草鹿の報告書にザッと目を通した。

――が。

漢字はほとんど無く、平仮名ばかり。その平仮名にもあちこち間違いがあり、たった数行しかないのに、読むことに少しの時間を要した。

「…はあ」

全てが読み終わり、日番谷は大きくため息をついた。肩をうなだれ、やっぱり書かせるんじゃないかった、後悔する。

「何、お主がため息をつくことではない。しかし…十一番隊にも、ちゃんと報告書の書き方を教えてやらねばならんな」

「そうっすね」

総隊長が言った事に頷く日番谷。紙を総隊長に返却する。

「それじゃ、正式な報告書はここに置いておきます。失礼しました」

日番谷が書いた山ほどあるその資料と、やちるが打った、一枚の紙にも及ばない、僅か数行。その量の違いに総隊長は思わず微笑する。外見年齢はそこまで大差は無いというのに、こんなにも違うとは、一体どう事なのだろうかと総隊長は考えた。ひらり、とやちるの報告書を何の気なしに裏返してみる。

「…む？」

平仮名ばかりで、読みづからったが、そこには言葉が書いてある。

「見せるな、とはそう言うことじゃったのか…」

と、また微笑したのだった。

「あ、隊長、お帰りなさい」

「ああ」

やけに機嫌がいい。声のトーンと、返事の速さですぐにわかった。乱菊は、いつものように椅子に付いた日番谷に、乱菊は訊く。

「何か良い事でもあったんですか、隊長？」

「いや、別に」

——絶対嘘だ。

乱菊は直感した。大体、やちると一緒に任務に行った後は、いつも日番谷は不機嫌だったはずだ。こんなにも上機嫌だった事は過去に無い。

「…松本、お前…また仕事やってなかったのか…」

「あゝ…そのお…すいません…」

「…ったく…しょうがねえな。俺がやるから、お前は大人しくそこで座ってる」

…そして、こんなに優しくかった事も。
いつもだったら「松本！！ てめえ、またサボってやがったのか！
！」などといった怒号が聞こえてくるはずである。それが無いのだから、乱菊はとことん不審がった。なにか、絶対にいい事があった。乱菊はその性格ゆえ、その理由がとても気になった。だが、日番谷からそんな事を聞き出すなんて到底難しい。

「…何考えてんだろうな、あいつは…」

小さく聞こえた日番谷のその声は、どこか優しく、楽しんでいる声だった。

——ほづこくしょ

くろいねこがとじこめられてて、ひつちーとあたしはそれをたすけた。
とてもたのしかった。またひつつーといっしょにしごとができたらしいな。

あ、ひつつーにはみせちゃダメだよ。

ひつつーだーいすき！

けんちゃんのパパで、ひつつーはあたしのだんなさんがいいなー♪

f
i
n
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893g/>

ほのぼの報告書

2010年10月12日18時49分発行